

Cinema エッセイ

Between Cinema & Geology

by ロッキー鈴木

少年時代、20世紀フォックスは2001年になったら21世紀フォックスになるんだ、と確信していた私であったが、20世紀末のSF映画の中で、あの「エピソード1」をしのぐヒットを記録したのが、マイケル・ベイ監督の「アルマゲドン」。日本の観客には、冒頭のニューヨークの大惨事のシーンで「しいよおおびいい〜ん!」と叫ぶ買い物狂いの日本人というチョイ役で出た松田聖子の怪演でも話題になった(んじゃないかと思う)。

さて、この映画、1998年に日本公開となったミミ・レダー監督の「ディープ・インパクト」とシチュエーションがそっくりでびっくり。ともに、地球に小天体が衝突することが判明、核爆弾を小天体の地中深く埋め、爆発させ、あるいは軌道を変え、衝突をまぬがれよう、ということになる。そこで人類の運命を少数の男たち(世論を配慮したか、どちらも1名だけは女)に託す。

ただし、「有事」に頼りになるのはアメリカだけなのであって、クルーは当然全員アメリカ人だし、乗り物は世界に冠たるスペース・シャトル長距離仕様というところまで同じ。

この意味で特筆すべきは「アルマゲ」に登場するロシア宇宙ステーション(ミール)の管理人のおっさん(名前がわからん)で、墜落寸前のミールからシャトルにころげこんでくるが、どこから見ても本物の変質者、ステーブ・ブシェミの陰が薄くなるほどの超人ぶりみせる。こういう面白いキャラは、東西の壁がなくなった効用か。

訴訟社会のアメリカで、裁判沙汰にならないのはなぜ?と考えてしまうほどよく似ている両作品だが、設定上の違いは、接近してくる小天体が「ディープ」では彗星であるのに、「アルマゲ」では小惑星。ご存じの通り、彗星は

太陽系外から太陽の引力に引っぱられて長い長い楕円軌道を描いて地球に近づいてくるもので、組成は水や気体が凍りついた、デカイロックアイスのようなもの。太陽の熱で溶け出したものを「尾」として引きずる。

一方小惑星は、火星と木星の間の小惑星帯に数多く分布し、組成は火星と同じく、地球型の鉱物質である。「テキサス州くらい大きさ」の小惑星が本当に宇宙をさまよっているのかわからないが、「国家予算で監視できるのは、全天体のほんの数パーセント」という説明は、リアルでオソロシイ。

もう一つ、一番肝心な違いは、「ディープ」の黒人大統領、モーガン・フリーマンがロバート・デュバル以下NASAの宇宙飛行士5人に運命を託すのに対し、「アルマゲ」は6人の宇宙飛行士とブルース・ウィリス率いる石油採掘のプロ8人を組み合わせ、保険をかけた2機のシャトルに分乗させた点だ。

結果としてデュバルは爆破に失敗し、残った核爆弾もろとも彗星の亀裂に飛び込み、自らを犠牲にして地球を救う。ロートル機長め、と馬鹿にしている若いクルーを説得し、地球の家族と最後の交信をさせる人間ドラマは、制作者スピルバーグの「ただのオタクとちやいまっせ」という意地がかいま見える。

一方ウィリスは、苦勞の果てに数キロに及ぶボーリングを敢行、遠隔操作の不調から現場でスイッチを押す役を引き受け、クルーを脱出させる。爆破はみごと成功、さすがのダイハード男も宇宙からは生還できなかったとみえるが「これがプロヤ」と感心させる。

餅は餅屋、ボーリングはボーリング屋、ということか。

(本号からCinemaエッセイに筆をふるって

ただろッキー鈴木こと鈴木洋樹さんは、山形
在住で名物パン屋（頑固屋さん）の御主人
です。シネマと地質の秘密をどんどんdisclose
していただきます。）

